

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

■ 大震災に思う

山岡洋一

ー 一つの文明の終わりと翻訳者の立場

エネルギーを使いたい放題使う生活様式は終わった。この危機にあつて、現場の人たちはしっかりしているが、上に立つ人間は責任回避に終始している。惨憺たる状況だが、翻訳者は誇りと責任感をもって仕事をしていくしかない。

■ 翻訳とは何か—研究としての翻訳（その8）

河原清志

ー 文化翻訳論（1）

「翻訳」という言葉はさまざまな意味合いで使われる。102号では通常の意味での「翻訳」（ある言語テキストを別言語テキストに訳す営為）を取り上げて、「翻訳とは〇〇である。」というテーゼの探究を「翻訳の社会的役割論」として論じた。本稿では、「翻訳」という概念をメタファーとして使って世の中の事象を説明する諸理論を検討し、それらが通常の意味での翻訳を論じるうえで有効かどうか探してみたい。

■ モンゴル通信

北村彰秀

ー モンゴルの翻訳事情(1)—いたるところにある翻訳サービス・センター

ウランバートルの町の中を歩いていると、いたるところに翻訳サービス・センターの看板がある。これほど目に付く所は、他には世界のどこにもないのではないかと思う。

翻訳通信 〒216-0005 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC012007@nifty.ne.jp
(アットは@に変えてください)

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

一つの文明の終わりと翻訳者の立場

3月11日、震源地からかなり離れた川崎市でも、揺れは大きかった。事務所の書棚が半分近く倒れ、耐震用のつっぱりのある棚まで倒れた。土曜日と日曜日に書棚をおこし、本を床に積んで、何とか仕事を再開できるようにしたが、混乱が大きくなったのは月曜日からだ。原子力発電所の事故と震災の被害拡大が気になるし、そのうえ無計画な停電で仕事どころではなくなったのである。

仕事を手につかないので、ふだんはまずみないテレビをみるが多かった。これほどみたのはたぶん、11年ぶりだと思う。そこで目にしたのは、惨憺たる状況だった。震災の被害は現実であって是非もない。問題はこの現実はどう対応するかだ。ところがこの危機に、政府や関係省庁、企業などのトップがみな、指導者としての資質も覚悟ももたないように思えた。そんなことはもちろん、分かっていたのだが、危機のさなかに無能ぶりを見せつけられれば衝撃を受ける。危機になれば各人の重みが露わになる。そして今回、露わになったのは、庶民や現場の人たちが冷静にしっかりした行動をとったのに対して、上に立つ人間がうろたえ、責任回避に終始している姿だった。血走った目で、あるいはうつろな目で、落ち着いて行動してくださいなどと呼び掛けている姿をみれば、不安にかられ、冷静ではいられなくなるではないか。

政治屋はつぎの選挙のことを考え、政治家はつぎの世代のことを考えるという言葉がある。名言だとは思いますが、不十分だとも思う。つぎの世代のことを考えるだけなら、一翻訳者でもできる。政治家というからには、考えるだけでなく、国民を指導し、責任を負わなければならない。指導と責任、この2つがなければ政治家とはいえないはずである。ところがいまだきの政治家にとって、指導と責任は何としても避けたいもののようなのだ。指導はしたくない、責任は回避したい、これが与党、野党を問わず、いまの政治家の基本姿勢のようなのだ。

それだけではない。今回、目にしたのは、政治家だけでなく、官僚も企業経営者も、揃いも揃ってうろたえている姿だった。たとえば、保安院のうろたえぶりは酷かった。聞き慣れない役所のお役人なの

だからこの程度の人物でも仕方ないなどと思っはいけない。正式には経済産業省原子力安全・保安院であり、幹部はあの通産省に入って出世してきたキャリア官僚なのだから。大蔵省とともに日本の優秀な官僚機構を代表するとされてきた通産省、日本経済の司令塔とされてきた通産省のキャリア官僚が保安院の指揮をとっているのだ。経産省の組織だから業界寄りだなどという意見もあるようだが、業界すら頼りにできない無能ぶりがあの通産官僚の実像だったことの方が重要ではないだろうか。

東京電力の経営者も、みっともない姿をさらしていた。東電といえば、日本を代表する企業の一つであり、何人もの著名な経営者、財界人を輩出している。さすがに中堅若手に素晴らしい人材がいることは原発事故の現場で証明されたといえるのだろうが、経営者はまったく頼りない。危機には昼行灯（ひるあんどん）になる人物だと思えた。昼行灯自体が悪いわけではない。平時には昼行灯だが、危機管理マニュアルなんぞが役立たない本物の危機になれば、行灯で行く手を指し示し、みなを導くようになる指導者もいる。危機のときに昼行灯になるのは話が逆であり、早々にお引き取りを願うしかない。

危機のときにこそ力を発揮する意味での指導者は、政界にも官界にも経済界にもいなかったように思える。危機になると、こんな時期に責任ある地位についていたのは不運だった、とんだ貧乏くじを引いてしまったと嘆いているようなのだ。それでも日本がもっているのは、庶民や現場の人たちが優れているからだろう。下は一流でも、上は三流というのが現実ではないだろうか。

忸怩たる思いがするのは、上の立場にある人たちが自分とほぼ同じ世代に属しているからだ。団塊の世代は三流の人物しか生み出せなかったようなのだ。現場にはプロらしいプロがいるが、上にいるのは素人ばかりではないか。

だが、それ以上に重要なのは、今回の震災が一つの文明の終わりを示しているように思える点である。阪神・淡路大震災とは違うのだ。愛する故郷の神戸は地震で壊滅したが、短期間に復旧した。少なくとも

も表面上、地震以前と変わらぬ都市になった。これでいいのなら、上は三流でもいい。現場の人間に任せておけば、復旧工事を着実に進めてくれる。だが、これでいいのか。

津波の被災地を元の姿に戻し、つぎに津波がくるまではびくびくしながら生活できるようにしようとは誰も考えないはずだが、それだけではない。無計画停電で露わになったのは、エネルギーに頼り切った生活がいかにも脆いものだったかである。地球温暖化が重要な問題になって、エネルギーを使いたくだけ使う生き方には反省の機運もでていたが、実際には化石燃料の消費を減らせばいいということで、原子力がふたたびもはやされるようになっていた。いまでは日本の発電能力の約 30%を原発が占めるようになり、この比率がさらに上昇する状況だった。これが地震前の姿だ。ここに戻ればいいと考える人がはたしているのだろうか。今回の事故で福島第 1、第 2 はもちろんだが、すべての原発が止まると考える方が現実的ではないだろうか。

そのとき、天然ガスや原油の輸入を増やして火力発電を増やすことが解決策になるのだろうか。そんなことは考えにくいというのであれば、エネルギーを使いたくだけ使う生活様式はもう終わりだと考えるのが常識的だと思う。エネルギーに頼る生活様式は今回の震災で終わった。これからはエネルギー消費を減らし、使うエネルギーは自給する方向に進むしかないのだろう。循環型の経済、生活様式に変えていくしかない。幸いにして、有望な考え方や技術は豊富にある。原発の 1 基分の建設費を注ぎ込めば、これらが一斉に開花するだろう。この見方が正しければ、今回の震災では阪神・淡路とは違って、復旧を目指さなくてもいい。復旧ではなく、21 世紀の新しい文明を目指せる。危機を好機に変えられる。

いいかえれば、指導者の出番なのである。指導者になるべき立場の人間がみな、貧乏くじは引きたくない、こんな時期に責任を負わされてはかなわないと考えているような現状が悲惨だと思うのは、このためだ。

翻訳者の立場でこの惨状について、できることがないわけではない。翻訳者は翻訳の対象を柔軟に選択できる。古今東西の優れた文献のなかから、いま、社会が必要としているものを選んで翻訳することができるのである。これは翻訳者の特権であり、この特権を活かさない手はない。出版社などの客先が発

注してくれるのを待つ姿勢をとらなければいけないわけではない。いまこれを訳すべきだと思える文献があれば、「翻訳通信」に投稿して提案してほしい。提案が心ある発注者に届くよう、微力ながら手助けする。

もう一つ重要なのは、自分の立場でまともな仕事をしていくことだろう。素人のような頼りない人間が目立つ世の中で、プロとはどういうものかを示していくことには意味があるはずだ。翻訳者は現場の人間なのだから、誇りと責任感をもって仕事をしなければならない。

翻訳者なら誇りと責任感をもって仕事するのは当たり前ではないかと思えるかもしれないが、実際にはそうになっていないことが少なくない。必要があって地震の直前に読んでいた翻訳書がその典型だった。訳文の完成度の高さで定評のある翻訳家が訳したことになっているが、酷い出来なのだ。何人かの事情通に理由を聞いてみたところ、ほぼ間違いないだろうと思える構図がみえてきた。この翻訳者は同じ分野でたしかに「完成度の高い」訳書を何点かだしている。しかし実際にはどれも、ゲラが真っ赤になるまで編集者が直して、ようやく出版にこぎつけたものだったようなのだ。そこまでの仕事をする編集者のプロ意識と実力には感嘆するしかないが、そんな裏事情を知らない他社の編集者がその翻訳者に依頼し、原稿やゲラをろくに読もしないまま出版してしまったのだろう。この翻訳者はつぎの世代の読者はおろか、たったいまの読者に対してすら、責任を負っていない。原稿に問題があれば修正するのは編集者の責任だと考えている。そのままでは出版できない原稿をだしているのに、印税は支払ってもらえると思っている。何という思い上がり、何という厚かましき、何という無能ぶりなのだろう。

翻訳に携わるのであれば、翻訳屋になってはいけない。翻訳家になるべきだ。読者に対して、さらには次世代の読者に対しても責任を負う。読者の多くは原著を読もうと思えば読めるはずなので、原著を読むよりはるかにいいと思われる翻訳を提供する。原著が難しいほど意欲を燃やす。そして、プロの仕事とはどういうものかを世の中に示していく。そういう姿勢をとれば、翻訳は楽しくやりがいのある仕事になる。

文化翻訳論（1）

「翻訳」という言葉はさまざまな意味合いで使われる。102号では通常の意味での「翻訳」（ある言語テキストを別言語テキストに訳す営為）を取り上げて、「翻訳とは〇〇である。」というテーゼの探究を「翻訳の社会的役割論」として論じた。本稿では、「翻訳」という概念をメタファーとして使って世の中の事象を説明する諸理論を検討し、それらが通常の意味での翻訳を論じるうえで有効かどうか探ってみたい。

翻訳とは何か—翻訳概念の多義性

翻訳とは実に多義的な概念で、その定義を専門的に規定することも、翻訳（研究）の対象を特定することも難しく、結局のところ、人間の営為はすべて翻訳である、とさえ言うこともできるかもしれない。

人間存在そのものが、本質的に「異領域間」的であり「翻訳」的だともいえる。

（大橋 1993, p. 32）

とは極端な見解であるが、その背後には「異文化間」の出会いおよび交流を、広義の「翻訳」と捉えて翻訳概念の脱構築を行う企てがある。そして、

一般に「文化の翻訳」は、芸術や思想のそれであれ制度や技術のそれであれ、「同じ次元内」での水平的な移し—置きである。それに対して異領域間でなされる翻訳は、「異次元間」の移し—置きである。ふつうの意味での翻訳においては、原書と訳書とでは言語は異なっているが、あくまでも同一性の保持が基軸となる。しかし異領域間の翻訳に際しては、むしろ作品の差異化がより重要な眼目となる。

（大橋 1993, p. 31）

とあるように、異領域間・異次元間を行き来することも翻訳であり、その意味で人間の「生死」そのものが翻訳であると大橋は言う。

このように「翻訳」概念はメタファーとして使う限り、果てしない可能性を秘めているし、その可能性を追求して本来の意味での「翻訳」へ逆照射することで見えてくるものがあるのかもしれない。

そこで本稿ではもともと人類学の営為として提唱された<文化翻訳>を鍵概念として、メタファー（喩）としての「翻訳」を探ってみたい。

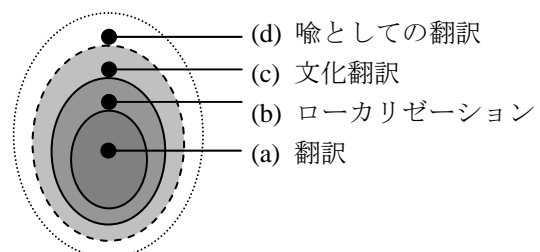
翻訳とは何か—翻訳の射程の可能性

拙著「概説書に見る翻訳学の基本論点と全体的体系」（2011）で「何を翻訳とするか？」について「翻訳」概念の多様性を論じた。

翻訳の定義、射程（記号間翻訳・言語内翻訳をどこまで含めるか）、類似概念との峻別（transliteration、trans-creation、trans-editing、adaptation、localization、appropriation 等との区別）——何を以って翻訳とするかが争点となる。文学翻訳をプロトタイプとして、同心円状に非典型的な翻訳形態が布置される。その外円には文化（の）翻訳と言われる、記号間翻訳が存在し、他方で翻訳類似概念（adaptation、localization、appropriation など）もそこに布置され、隣接領域と境界面を明確化すべきか、接点領域を拡大すべきかが問題となってくる。さらにその外円には翻訳をメタファーとして捉える見解、つまり社会的事象を翻訳と看做したうえで当該社会現象を分析する学派が存在することになる。いずれにしても、翻訳学がその射程をどう（トゥーリーのいうように規範的ではなく記述的に）定めるのか、今後の動向に注目したい。

（河原 2011）

これを敷衍してさらに細分化した図で示すと以下のようなになるだろう（但し、これはあくまでもモデルであって、境界線は極めて曖昧であるし、クリアーに割り切れるものではない）。



- | | |
|-------------|------------------|
| (a) 翻訳 | : テキスト → テキスト |
| (b) ローカリ | : 商品 → 商品 |
| (c) 文化翻訳 | : 文化現象 → テキスト |
| (d) 喩としての翻訳 | : 社会現象 → 翻訳への見立て |

これを概念規定すると、異論もあろうが、ひとつ

のモデルとしては以下になるだろう。

(a)翻訳：

翻訳者が元の言語（起点言語）での原語書記テキスト（起点テキスト）を他の言語（目標言語）で書かれたテキスト（目標テキスト）に変えること。（Mundayによる定義）

(b)ローカリゼーション：

ある製品を、それが販売され使用される目標となる場に持ち込み、言語的かつ文化的に適切なものにする。こと。（LISAによる定義）

(c)文化翻訳：

特定の文化の「意味」を解釈し、それを他者へ伝達すること。（Geertzによる定義）

(d)喩としての翻訳：

翻訳を比喩として使うことで、社会現象を分析し説明すること。

そして、ヤコブソンの翻訳3類型は以下のとおりである。

(1) Intersemiotic Translation：記号間翻訳（ある記号を別の記号で表現する）

(2) Interlingual Translation：言語間翻訳（ある言語を別の言語に翻訳する）

(3) Intralingual Translation：言語内翻訳（ある言語内で言い換えをする）

(Jakobson 1959/2000, p. 139)

これに照らして(a)~(d)を分析すると、以下のようになるだろう。

(a) (狭義の) 翻訳：(2)言語間翻訳

translating “text” as “text”

(b)ローカリ：(2)言語間翻訳、または(1)記号間翻訳

translating “product” as “product”

(c)文化翻訳：(1)記号間翻訳

translating “culture” as “text”

(d)喩としての翻訳：(1)記号間翻訳 (?)

explaining “social reality” as “translation”

まず、(a) (狭義の) 翻訳は(2)言語間翻訳と言える。精確には translating “text” in one language as “text” in another language となる。翻訳のプロセスに着目すれば、translating “text” into “text”と言えるが、ここでは翻訳とは解釈したものを表現する等価構築行為と考え（英語の“as”は「等価」を中核的語義とする）、translating “text” as “text”としている。

(b)ローカリゼーションは、言語面に着目すれば(2)

言語間翻訳であるし、広く新たなロケール（locale；製品の最終的な使用における言語的、経済的、文化的な要素の集合）に向けた製品の準備ととらえれば、(1)記号間翻訳であるとも言える。

この(a)と(b)はいわゆる「翻訳学」がその研究対象にしているものであり、本稿ではこれ以上詳述しない。本稿では、人類学や社会学に端を発する(c)や(d)に着目したい。

翻訳とは何か—文化の翻訳について

草稿ではあるが、拙著「文化の通訳・翻訳」（2012年刊行予定『異文化コミュニケーション事典』春風社）に、以下のように記した。

「文化の翻訳」とは、特定の文化の「意味」を解釈し、それを他者へ伝達するという、文化人類学における研究営為を指す言葉として使用されてきた。クリフォード・ギアツ（Clifford Geertz）は、様々な文化的事象は、共同体の成員にとっての「意味」を運ぶ「象徴」であり、「文化」とは、そうした象徴の結束性を持った連なり（広義の「テキスト」）であるとした。人は、生についての知識や生に対する態度（すなわち「意味」）を、そのような象徴の中に読み取り共有し、それを通して生を意味付けしていると捉えた。「文化の翻訳」とは、そうした特定の共同体の成員が織り出すテキスト、言い換えれば、彼ら彼女らが書いたテキストの中に、彼ら彼女ら自らがどのような「意味」を読み取っているかを読み取る行為、解釈を解釈するという多層的な解釈の過程自体を指している。

つまり、このような学説に依拠すれば、特定の文化的意味を解釈し、それを言語によって記述・説明することも「翻訳」となる。記述・説明のための言語は、その文化の言語であっても、他言語であってもよいことになるし、即時性を重視するならば、記述・説明を口頭や手話で行うことを「文化の通訳」と解しうる。このように広義に捉えれば、外国文化などの記述、説明、展示といった日常的な実践も、広く文化の通訳・翻訳に含めることができよう。異文化コミュニケーションの円滑な実現という文脈で捉えなおすなら、文化の翻訳とはバイ・カルチュラルな媒介活動のすべてとも考えられ、今後、メタファーとしての文化の「通訳・翻訳」の議論が多分野で展開されるだろう。

ところが、ある言語で書かれた固定したテキストを別の言語に変換すること（言語間翻訳）を典

典型的な「翻訳」だと考える翻訳学の学説のなかには、起点テキストが不在で目標テキストも固定しない「文化（の）翻訳」を、翻訳に類似した概念である翻案などと同様、翻訳研究の対象から一線を画して考えるべきだという主張もある。しかし、翻訳を言語テキストから解放した文化翻訳の研究は、翻訳者の仲介的位置、文化的異種混濁性、異文化形成作用、文化的越境性などを扱い、文化的プロセスや翻訳主体に注目した翻訳研究の新たな潮流にもなっている。

「文化翻訳論」を議論してゆくうえで、このような流れが、人類学に依拠しつつ異文化コミュニケーション学へ敷衍し、かつ翻訳学へ落とし込むひとつの論調になると筆者は考えている。

加藤（2010）によると、「文化の翻訳」は E. E. エヴァンス＝プリッチャードが 1950 年のレクチャーでこの語を使用したことが最初だという。

人類学者は……彼ら [未開民族] の言語を学び、彼らの観念によって考え、彼らの価値観に従って感ずることを学び取ります。そこで、人類学者は、自分の文化の、概念上のカテゴリーや価値観によって、また人類学の全般的な知識によって、未開人との生活体験を、批判的に捉え、これに解釈を加えていくのです。言いかえますと、人類学者は、一つの文化を別の文化に翻訳するわけです。（エヴァンス＝プリッチャード 1971, p. 22）

小泉（1984）をまとめると、以下のようなになるだろう。つまりクリフォード・ギアツ（Clifford Geertz）によると、「意味」とは、知覚・認識・感情・情念・理解・判断・道徳などを含む思考一般である。そしてギアツは意味の運び手を表す「象徴」という概念と結びつけ、「文化」を象徴と意味のシステムであるとした。象徴とは人が生についての知識と生に対する態度を伝達し存続させ展開する手段で、その象徴に表現される概念が歴史的に継承されて作るシステムが文化である。そして、象徴によって導かれ組織された行動というダイナミックに創出される象徴（広義のテキスト）を読み解くことが文化の翻訳である。つまり、特定の文化で行動する人々が自ら書いたテキストを自らどう読み取っているかを読み取ること、理解を理解し、解釈を解釈するという構築行為が解釈人類学における「解釈」である。

このように、荒っぽく言えばギアツは、「文化」を「テキスト」と看做し、その広義のテキストを

（狭義である）言語テキストで記述・説明することが文化の翻訳であるとしている。

特に近年はテキスト（text）という語が使われるが、これは文化を解釈することが、ある暗号的コードの裏に隠され固定された意味を、あたかも考古学者が遺跡を見つけ地質学者が地層を掘り出すように、あらかじめそこに存在する「なまの事実」として再発見することではなく、あたかもテキストを読みとるように、そこにダイナミックに創り出されつつある意味を再構築することであるということを主張している。つまり文化の分析とは、テキストという「何かについて何かを言っている」（saying something of something）ものを、解釈を構築するという意味で読取ろうとするようなものである。ただしこのテキストは文字や言語ではなく行動によって書かれている。この「行動によって書かれたテキスト」というのは、必ずしも比喩ではない。というのは言語や文字ばかりでなく行動も、それが意味を運ぶかぎりにおいて象徴だからである。そこでこのテキストは、象徴によって導かれ組織された行動というダイナミックな象徴によって書かれていることになる。

（小泉 1984, pp. 249-250）

ここで、「テキスト」を「記号」、すなわち「人間が『意味あり』と認めるものすべてのこと」と読み替えてしまうならば、狭義の翻訳も文化翻訳に包摂されるし、文化翻訳も記号の意味づけ行為（という構築行為）として捉えることができる（翻訳通信 105 号拙著「カセット効果論（1）：無限更新の意味生成の営み」参照）。このことは、

喩としての翻訳。[...] 情報伝達にさいして情報の発信者と受信者が個別に遂行するのは、つねに一種の翻訳行為—自己の「内面」の翻訳、および情報媒体の翻訳—である以上、いかなる言表、伝達、解釈であれ、それは一種の「翻訳」と解されてきた。（真島 2005, p. 10, p. 34）

とも相通じる「翻訳」概念の捉え方もいえるだろうし、小山（2008）の社会記号論系言語人類学による翻訳の理解（小山 未刊行）とも合致するだろう。この点において、「文化翻訳：translating “culture” as “text”」の“culture”を“text”と捉えなおすことで狭義の「翻訳」と連続した地平で議論ができることになるし、文化翻訳における解釈の構築性を狭義の翻訳に逆照射し、構築行為としての等価のダイナミズム

を捉えた翻訳理論の展開も可能となる。では、その実益はいかなるものだろうか。

翻訳とは何か—文化の翻訳と言語の翻訳

加藤 (2010) は、人類学の難しさを、大きく2つの側面に分けている。

一つには、ある言語体系内で初めて成り立つ思考を、他の言語体系に「移し変えて」表現することの難しさである。[...] この種の「翻訳の問題」は、「言葉」というものに依拠する学問 (人文・社会科学) 一般と文芸活動に広く見られるものであり、特に文化人類学的とはいえない。

他方で、リーンハートは、「ペリカンは私の兄弟だ」といった「未開人」の発言を、どんなに辞書的に正しく翻訳しても意味はないという、人類学に独特の「翻訳」事情も指摘する。そして肝心なのは、このような一見とっぴな等式を、「~のようなもの (アナロジー)」の関係としてではなく、まず現地人のように「同一のもの」の関係として肯定することだという。これは言い換えれば、慣れ親しんだ論理をいったん離れ、現地人の思考を直感的に理解せよということのようである。
(加藤 2010, pp. 114-115)

この点を筆者なりに敷衍してみたい。前者の難しさは言語表現全般にあてはまることだと言える。これは文化フィルター (Katan 1999/2004) がモデル化を通して機能するのと同じであると考えられる。

すべてのフィルターは同様にモデリングを通して機能する。モデルは通常、例えば「現実」のような複雑なことを単純化しその意味を理解するうえで役に立つ方法である。あらゆるモデルは Bandler and Grinder (1975) によれば、3つの原理から成り立っている。削除、歪曲、一般化である。人間がモデル化を行う場合、われわれは現実に行われていることすべてを知覚することはできない (削除)。またわれわれが目にするものを選択的に焦点化し、それを既知のものや目を引くものへと適合する傾向がある (歪曲)。そして細部は自分自身のモデルから埋め合わせをしたり、突出した差異をなだらかにしたりして (一般化)、結果として出てくる「世界の地図」を有益なものにするのである。
(Katan 2009、翻訳は筆者による)

つまり、ある現実 (reality) を言語によって表す

場合 (翻訳対象たるテキストもここにいう「現実」と考えることもできる)、すべてをそのまま (別の) 言語に移し変えることは原理上不可能であって、文化フィルター (ないしモデル) を通して何らかの削除・歪曲・一般化が起こる。また、語られること (翻訳物も含む) はその現実の一部であり (言語はパートノミーである、という言い方ができる)、その現実の話し手 (書き手) が現実として把握したこと (構築結果でもある)。さらに語られたこと (言説) がコミュニケーション行為を通して伝達されたり伝播し、それが反作用的に現実を規定することで、その現実も無限更新的に意味の改変が行われる (翻訳の対象たる原テキストの意味解釈の改変を含む)、という構築主義的な捉え方に立つと、翻訳を含む表現行為の一般論として、学問一般の問題意識を共有することもできよう。

また、前者のうち「他の言語体系に移し変えて」という箇所に着目すれば、サピア・ウォーフ仮説の言語相対性の問題も浮上する (加藤の前半の指摘はこの点だといえる。但し、同仮説の本義は言語構造・語用論的無意識・使用者の言語意識という三者間の相関と齟齬に関する一般理論を言う。小山 2011, pp. 10-15)。さらに、ここにいう「言語」を国民国家=民族言語=文化という近代主義的捉え方から解放した考え方を基盤にすれば、言語的多様性の今日的な議論とも接合可能であろう (しかし、この点は本稿では立ち入らない)。

以上、前者の問題に関しては、およそ言語表現一般が抱える根深い論点を深く追究することで、翻訳に伴う難しさをさらに深く議論することが可能になると思われる。

後者の難しさに関しては、青木保が『文化の翻訳』のなかで詳述している。

ロドニー・ニーダムが引き出す問題は次の3点に集約される。すなわち、

- (1) 英語の *belief* が外国語に逐語的に翻訳される時、それらの語に与えられる意味の多様さは驚くばかりで当惑せずにはいないこと、
- (2) 他の言語と比較する場合、その語に含まれるさまざまな意味の組み合わせの中から一つだけ特別の意味を引き離して捉え、それを英語 *belief* の等質語として示すことは一見可能なようにみえても、それらの意味に対して英語による一つの解釈が根本的に異なるような言語もあって、翻訳に相当するとされた語のもつさまざまな含意の中の一つだけを決定的なものとして取り上げることは不適當であること、

(3) ヌア一人の場合にみられるように、英語の belief に相当する言語概念がまったく存在しない言語があること、の三点である。

[...]ここに引用した検討から推量しうることからみても、翻訳の問題が人類学的認識の根幹に横たわる問題であることは理解される。

(青木 1978, pp. 57-58)

この指摘は狭義の翻訳にも当てはまるのではないだろうか。つまり、青木 (1978, p. 51) も言うように、異質の言葉・概念を母国語におけるそれによって「読み込んで」しまったり、人類学者（あるいはこの場合、翻訳者）それ自身が自分の文化的偏向をすでに有しているという事実がある。言語が「象徴による文化への手引き」（サピア）であるならば、この手引きには常に両刃の剣が隠されているというべきなのだろう。

そして、このことは加藤 (2010) によると、大塚和夫のいう、フィールドワーク中に「明確な言葉での整理ができないまま、『なんとなくそんなものか』といったかたちで、納得してしまう『理解』」、あるいはアルフレッド・シュッツのいう、論理的というより身体感覚的な「異文化の第一次的理解」、または青木保のいう、「論理的—構造的な理解」に対する「直感的—メタファー的理解」といった、言語体系外の「生活実感」と呼べるものに依拠する割合が高い文脈では特にそうであろう。コミュニケーションの重要な手段である五官による言語的・非言語的活動も、文化による型づけを受けていることによって、総体としての文化が果たして他の総体へ翻訳されるものなのかという根本問題は、人類学だけでなく、翻訳学も常に自ら突きつけなければならない剣なのである。

翻訳とは何か—喩としての翻訳など

文化人類学（アメリカ）ないし社会人類学（イギリス）におけるメタファーとしての「翻訳」＝「文化翻訳」の考え方の典型は、文化自体を解釈可能なテキストと見立て、それを言語テキストによって記述・説明すること、また解釈を解釈し記述するという複層的構築行為であり、この学問領域が問題意識として有している論点を共有することは翻訳学にとっても実益があることを以上で少し検討した。

次号では異領域間の翻訳（大橋良介編『文化の翻訳可能性』）、翻訳社会学（ピム『翻訳理論の探求』）、ポストコロニアリズム（スピバク、バーバ、ニランジャナなど）を検討した上で、これらの「喩としての翻訳」の諸理論を翻訳学から総括する試み

を行う予定である（Baker and Saldanha 2011 所収の“cultural translation”も参照）。「人間の営為はすべて翻訳である」という冒頭に掲げたテーゼが「翻訳とは何か」の探究に資し、延いては異文化理解や異文化コミュニケーションに貢献することを期待したい。（但し、異文化コミュニケーションが孕むドグマは脇へ置くとして…。）

最後に青木 (1978) が文化翻訳者の使命について述べている箇所を引用したい。

ベンヤミンにならっていうならば、人類学者の使命は、異文化のなかに鎖されているあの純粹文化を翻訳固有の文化のなかに救済すること、異文化のなかに囚えられているこの純粹文化を翻訳のなかで解放することにあるとあってよいのである。

(青木 1978, p. 171)

参考文献

- 青木保 (1978) 『文化の翻訳』東京大学出版会
Jakobson, R. (1959/2004). 'On linguistic aspects of translation'.
In L. Venuti (ed.). (2004). *The translation studies reader*.
2nd edition. London & New York: Routledge.
Katan, D. (1999/2004). *Translating cultures: An introduction for translators, interpreters and mediators*. Manchester: St. Jerome.
———(2009). Translation as intercultural communication. In J. Munday (ed.). *The Routledge companion to translation studies*. London & New York: Routledge, pp. 74-92.
加藤恵津子 (2010) 「自文化を書く—だが、誰のために? 『文化の翻訳』をめぐるネイティブ人類学徒の挑戦」山本真弓 (編著) 『文化と政治の翻訳学: 異文化研究と翻訳の可能性』 (109-143 頁) 明石書店
河原清志 (2011) 「概説書に見る翻訳学の基本論点と全体的体系」日本通訳翻訳学会・翻訳研究育成プロジェクト (編) 『翻訳研究への招待』第5号: 53-80 頁
http://honyakukenkkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol5/03_vol5-Kawahara.pdf
小泉潤二 (1984) 「解釈人類学」綾部恒雄 (編) 『文化人類学 15 の理論』 (243-262 頁) 中公新書
小山亘 (2008) 『記号の系譜: 社会記号論系言語人類学の射程』三元社
——— (2011) 『近代言語イデオロギー論: 記号の地政とメタ・コミュニケーションの社会史』三元社
——— (未刊行) 「社会言語学的多様性と翻訳不可能性: メタ語用、言語変種/接触、社会指標性と記号論的全体」
真島一郎 (編) (2005) 『だれが世界を翻訳するのか: アジア・アフリカの未来から』人文書院
大橋良介 (編) 『文化の翻訳可能性』人文書院

モンゴルの翻訳事情(1)——いたるところにある翻訳サービス・センター

モンゴルの首都ウランバートルの町の中を歩いてみて、まず驚かされるのは、いたるところに翻訳サービス・センター（仮にこう呼ぶことにする）があることである。場所としては日本で言えば、コンビニや飲食店のあるようなところに位置している。すなわち、大通りに面したところ、あるいは人通りの多いところで、小さい建物の一角、そして大体は1階である。大きいビルの中の一室を借りてやっているという例はほとんどない。最低限机と椅子が1つずつあれば仕事可能なため、占めるスペースは一般にごくわずかである。看板がないと人も来ず、仕事にならないので、「翻訳サービス」の看板は必ず出している。どのような言語に対応できるかはっきり書かれていることもあるが、それはむしろまれであり、対応言語や対応分野（機械関係、法律関係、医学関係等々）は全く書かれていないのが普通である。そして何か翻訳をしてもらいたい場合にはその文書を持参し、そこにいる人物（事務員か翻訳者かわからないが）と交渉をすることになる。

普通の翻訳以外に、その場で口頭翻訳をしてくれるところもある。客は翻訳の必要な箇所を指摘し、翻訳者はそれを口頭で翻訳する。そして客はそれを書き留めるということになる。ただし口頭翻訳のためには、少なくとも人が2人座れるスペースが必要であることは言うまでもない。快適な仕事をするためにはかなりのスペースが必要になる。

もちろん翻訳サービス・センターや口頭翻訳のサービスはモンゴルに限らず、日本や欧米にもあるし、そして恐らく世界中にあると思うが、人口あたりの数はあまり多くはないと思う。そしてこれほど看板が目につく所も他にはないのではないかと思う。

モンゴル、特にウランバートルでこのようなサービス・センターが非常に多いのは、恐らくモンゴルという国の事情によるものであろうと思う。まず第一に、大陸の中にある国であるため、北のロシア、南の中国との関係が深い。次に人口も少なく、工業もあまり盛んでないため、輸入品が非常に多い。パンやお菓子、麺類、簡単な文房具等は自国で生産できるが、多少複雑なものになると、自国で工場を作って生産するよりも、輸入した方がはるかに効率が良い。輸入品も、例えばインスタントラーメンや衣服などは説明書を読まなくともほとんど支障ないが、料理に使う食材、薬品、電気器具等は、説明書が読めないとラチがあかない。また、対外的な仕事をする際には、外国語の文書を読むことも必要になる。

また、翻訳が収入になるということも見落とせない事実である。事務所費はかなり少なくて済むし、学生アルバイトを使うことも可能である。ただし、翻訳の質となるとあまり期待できない。露蒙辞典の語数が大体5万語なので、それ以外の辞書となると、3万語、2万語という場合もある。そのことから、翻訳の質もおして知るべしである。質の高い翻訳が必要であれば、有能な人物に個人的に交渉した方がよい。

一般に、ロシア語なら何とか読めるという人は多い。最近では英語のできる人もふえてきている。それ以外の言語は、やはり翻訳が必要という場合が多い。言語名をあげると、中国語、ドイツ語、Korean、日本語、チェコ語等に接する機会が多いと思う。

（スーパーでも韓国やチェコの食材が、モンゴル語の説明なしに売られている。）ただし、翻訳の必要が生じて、みんながサービス・センターを利用するわけではない。知人、友人に頼む人も多し、また、チェコ語などは、ロシア語に非常に近いので、料理に関する簡単な表現であれば、推測が可能である。

翻訳サービス・センターは実際の翻訳以外にもう1つやってくれることがある。それは翻訳証明である。すなわち、英語であれ何語であれ、そのモンゴル語訳の内容が、原文と同じであるか判断し、ハンコを押してくれる。わたしたちも日本語で書かれた書類のモンゴル語訳を官公庁等に提出する場合、ハンコが必要なため時々お世話になっている。

なお、モンゴルはあまり秘密厳守の国ではない。必要な場合には他の人の個人的な書類を見せてくれるようなこともある。このようなことは心得ておかなければいけないであろう。

お知らせ

拙著「東洋の翻訳論」、「続 東洋の翻訳論」、「東洋の翻訳論Ⅲ」、下記の書店で扱っていただけることになりました。各冊とも 735 円（税込）です。

（株）朋友書店

〒606-8311 京都市左京区吉田神楽岡町8番地

TEL : 075-761-1285 FAX : 075-761-8150

hoyu@hoyubook.co.jp

『Google 英文ライティング』で読者の圧倒的な支持を得た
遠田和子氏/岩淵デボラ氏の **特別講演会** 新刊記念

グーグル、アマゾンなどインターネットと電子書籍で fun(楽しく)&free(無料で自由)に
自分がほんとうに興味を持てる英語や英語の本を読もう!

「eリーディング英語学習法」



2011年3月発売

【開催日】 2011年4月23日(土) 13:30pm-16:30pm 【講演】 13:30pm-15:30pm 遠田和子氏/岩淵デボラ氏
【懇親茶話会】 15:30pm-16:30pm 【講演会参加料】 ¥5,000 (講演会と懇親茶話会) ※講演のみ参加される場合: ¥4,000
【講演内容】 アマゾンであなたにぴったりの本を探す方法/各種デバイスでのキンドルアプリの使い方/不動産英語 on the web
リスニングも同時に伸ばせるサイトの使いこなし方/パブリックドメインの上手な利用法 等

【司会】 (株)アイディ会長 アイディ『英文教室』主宰: 柴田耕太郎

【会場】 日本出版クラブ会館 3F 鳳凰の間 www.shuppan.club.jp

〒162-0828 東京都新宿区袋町6-1 TEL:03-3267-6111 最寄駅: 神楽坂駅・牛込神楽坂駅・飯田橋駅

本講演会情報は以下のサイトやブログでもご覧になれます。

・アイディ『英文教室』Web サイト: <http://www.wayaku.jp> ・講演者ブログ: <http://minamimuki.com/fun-and-free/>

- ★iPad、iPhone、アンドロイド携帯など、ネットに接続可能なモバイル端末をお持ちの方はご持参下さい。
- ★デバイスの利用経験のない方でもインターネットで英語の本に簡単にアクセスできるようになります。
- ★不動産に関する英文素材もとりあげます。
- ★講演終了後は、講演者を囲んで懇親茶話会を開催いたします。ご希望の方はお申込みください。
- ★英語に興味があっても電子デバイスは苦手という全ての方に聴いていただきたい講演会です。
- ご友人、ご知人にも本リーフレットをご転送いただければ幸いです。

遠田和子氏

日英翻訳者、翻訳学校講師 企業研修講師 アイディ『英文教室』
【ロジカル・ライティング講座】講師。青山学院大
文学部英米文学科卒業。在学中に文部省奨学
生として、米国カリフォルニア州パシフィック
大学に留学。大学卒業後、米国カリフォルニ
ア州フットヒル・カレッジ・スピーチ・コミュ
ニケーション学部で Speech Certificate を取
得。キヤノンで翻訳業務に従事した後、フリー
ランスとなる。著書に『英語「なるほど!」ラ
イティング』(共著)、『Google 英文ライティ
ング』、訳書に星野富弘の Love from the Depths -
The Story of Tomihiro Hoshino (共訳)がある。



岩淵デボラ氏

日英翻訳者、(有)南向き翻訳事務所代表、群馬県立女子大学講師。
米国カリフォルニア州パシフィック大学卒業。
在学中に青山学院大学に留学。1978年に英語
教師兼協力宣教師として来日し、それ以来、群
馬県前橋市に在住。著書に『英語「なるほ
ど!」ライティング』(共著)、Diversity in
Japan: A Reader (共著)、訳書に星野富弘
の Love from the Depths-The Story of
Tomihiro Hoshino (共訳)、宮部みゆきの
The Devil's Whisper, The Sleeping
Dragon などがある。



★参加お申込みと参加費用のお支払い★

■末尾の『参加申込書』に必要事項をご記入の上、e-mail または FAX にてお申込みください。

折り返し「受付」のメールをお送りいたします。※欄はかならずご記入ください。

■参加費用は当日、会場受付でお支払ください。領収書をご用意しております。

本講演会について柴田耕太郎主宰 アイディ『英文教室』<http://www.wayaku.jp> にも情報を掲載しております。

お問合せは: アイディ『英文教室』・【不動産英語塾】運営事務局まで TEL. 03-3357-1189 / eibun_seminar@id-corp.co.jp

参加申込書 柴田耕太郎主宰 アイディ『英文教室』/併設【不動産英語塾】運営事務局 行 ※メール又はFAXにてお申し込みください。

※ご氏名		ご職業	
大学名・会社名		参加人数	
所属学科・部署		役職名	
※ご住所	〒	※TEL/FAX	
		※E-mail	@
※懇談茶話会	✓印を付けてください。	<input type="checkbox"/> 参加する	<input type="checkbox"/> 参加しない

お申し込み
FAX番号

03-3357-4489

e-mail

eibun_seminar@id-corp.co.jp